

トランスナショナル・コミュニティ研究班 報告

研究所プロジェクト（第3年次）

境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ  
—地域間比較研究の定礎に向けて—

A Study on Transnational Communities in Asian Peripheries:  
Intending to lay Foundations of Comparative Area Studies

科研費 基盤研究B（海外学術調査）（第2年次）

「トランスナショナル・コミュニティの地域間比較—境域アジアの移住と生活の動態研究—」

代表 松本 誠 一

## I 研究所プロジェクト

「境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ——地域間比較研究の定礎に向けて」

《研究期間》平成20年4月～平成23年3月

《研究代表者》松本 誠一（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

《研究分担者》井出 弘毅（アジア文化研究所客員研究員）

植野 弘子（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

金 東光（アジア文化研究所客員研究員）

後藤 武秀（法学部教授／アジア文化研究所研究員）

小林 正夫（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

長津 一史（社会学部准教授／アジア文化研究所研究員）

山本須美子（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

### 《研究経過》

昨年度の年報掲載報告では、平成21年度10月末までの研究経過を報告したので、ここでは平成21年11月以降について報告する。なお、宮下良子客員研究員にも、この共同研究への参加をお願いしているので、関連業績を併せて記載する。

平成21年度

研究所プロジェクトによる日本・台湾境域現地調査

研究員	山 本 須美子
研究員	植 野 弘 子
研究員	松 本 誠 一

期 間 2009年10月31日～11月4日

調査地 台北市および近郊、花蓮市

本調査については『研究年報』第44号（「調査・研究活動」）に山本研究員により報告記事掲載済みにより、そちらを参照。

なお、植野研究員には平成21年度社会学部海外長期研究による台湾調査に従事中で、現地参加すると同時に、本調査に必要な各関係機関への調査協力依頼、宿泊所・交通機関の手配の労を煩わした。松本研究員は科研費により参加した。

平成22年度

研究所プロジェクトによる日本・韓国境域現地調査

研究員	松 本 誠 一
客員研究員	井 出 弘 毅

期 間 2010年8月21日～30日

調査地 福岡・対馬・釜山・巨済島

本調査の報告の詳細は後に掲載。

平成22年度

研究所プロジェクトによるフォーラム「台湾をめぐる境域」

開催日 2010年11月6日

開催場所 東洋大学白山校地

コーディネート：植野 弘子（研究員）

発表：松田 良孝（八重山毎日新聞）

松田ヒロ子（日本学術振興会特別研究員・上智大学）

上水流久彦（県立広島大学）

松本 誠一（研究員）

横田 祥子（日本学術振興会特別研究員・東京外国語大学）

西村 一之（日本女子大学）

コメント：大浜 郁子（琉球大学）

井出 弘毅（客員研究員）

後藤 武秀（研究員）

本フォーラムの成果は『白山人類学』第14号（2011年刊行予定）で印刷公表する。

## Ⅱ 科研費（基盤研究B）

「トランスナショナル・コミュニティの地域間比較——境域アジアの移住と生活の動態研究」

《研究期間》平成21年4月～平成24年3月

《研究代表者》松本 誠一（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

《研究分担者》植野 弘子（社会学部教授／アジア文化研究所研究員）

後藤 武秀（法学部教授／アジア文化研究所研究員）

長津 一史（社会学部准教授／アジア文化研究所研究員）

《連携研究者》青山 和佳（北海道大学准教授／アジア文化研究所客員研究員）

赤嶺 淳（名古屋市立大学准教授／アジア文化研究所研究員）

渡邊 暁子（社会学部助教／アジア文化研究所研究員）

《研究協力者》ジュナエナ・スレハン（マレーシア国民大学准教授）

崔 仁宅（韓国・東亜大学校教授）

平成21年度

「東南アジアの海と人」第4回研究会

開催日 2010年2月10日

開催場所 東洋大学白山校地

共通課題 “Reconsidering Social History of Maritime Folks in Southeast Asia: From the Sama-Bajau Perspectives”

コーディネート：長津一史

発表：長津一史、青山和佳（北海道大学）、ジュナエナ・スレハン（マレーシア国民大学）、ハジ・ムサ（サマ海文化・社会協会）、寺田勇文（上智大学）、赤嶺淳（名古屋市立大学）、門田修（スタジオ海）、立本成文（総合地球環境学研究所）（会議用語は英語）

本研究会の内容は『白山人類学』第13号に「『特集』東南アジア海域世界の社会史的再考——サマ・バジャウ人の視点から」（関係論文は英語）として印刷公表した。

### Ⅲ 《研究成果》

- 青山 和佳 2010年3月30日 AOYAMA Waka, "Neighbors to the 'Poor' Bajau: An Oral Story of a Woman of Cebuano Speaking Group in Davao City, the Philippines," *Hakusan Review of Anthropology*, Vol.13, pp.3-33.
- 2010年6月15日 (受田宏之・小林誉明と共編著)『開発援助がつくる社会生活——現場からのプロジェクト診断』大学教育出版
- 赤嶺 淳 2010年3月30日 AKAMINE Jun, "Trepang and Lalipan: A Linguistic Note towards the Reconstruction of Social History of Maritime Southeast Asia," *Hakusan Review of Anthropology*, Vol.13, pp.35-41.
- 2010年5月『ナマコを歩く——現場から考える生物多様性と文化多様性』新泉社
- 井出 弘毅 2011年1月22日 アジア文化研究所年次集会で「日韓境域の現状—対馬・巨済島を中心に」を報告
- 植野 弘子 2011年11月6日 「台湾をめぐる境域」フォーラムをコーディネート, 司会, および成果報告書(前掲)の編集
- 後藤 武秀 2010年2月26日 王泰升著(宮畑加奈子と共訳)『日本統治期台湾の法改革』東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター
- 2010年3月18日 「現代台湾における祭祀公業の変容——2007年祭祀公業条例を契機として」, 東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター編『アジア社会の発展と文化変容』, 259-271頁
- 小林 正夫 2010年3月18日 「ネパールにおけるグローバル経済と社会変動——人の往来と発想の変化がもたらす文化変容」, 東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター編『アジア社会の発展と文化変容』, 129-151頁
- 長津 一史 2010年3月30日 NAGATSU Kazufumi, "A Preliminary Spatial Data on the Distribution of the Sama-Bajau Population in Insular Southeast Asia," *Hakusan Review of Anthropology*, Vol.13, pp.53-62.
- 2010年3月10日 (加藤剛と共編)『開発の社会史——東南アジアにみるジェンダー・マイノリティ・境域の動態』風響社
- 松本 誠一 2010年1月23日 「韓国キリスト教会の海外布教——長老教巨済教会の事例を通じて」, 東洋大学アジア文化研究所年次集会で報告
- 2010年6月16日 「対馬島と向かい合う韓国・巨済島のコミュニティについて」八丈島・奥会津研究会 主催「(島嶼コミュニティ学会)設立 プレワークショップ『島嶼コミュニティ研究の視座と展望』」で報告
- 宮下 良子 2010年6月 「龍王宮の空間が語るもの」『コリアンコミュニティ研究』Vol.1 1-6頁
- 2010年 "Shamanism Crossing Boundaries: A case study of first-generation Korean Women living in Japan," *Studies of Urban Humanities*, Vol.1
- 2010年8月 "Shamanism Crossing Boundaries: A case study of first-generation Korean Women living in Japan," The 7<sup>th</sup> International Conference of Urban Humanities, University of Seoul で報告
- 2010年6月13日 「周縁の民族誌——大阪府堺市の在日コリアンコミュニティの事例



から」日本文化人類学会第44回研究大会で報告

2010年 「ウトロ地区のこれまでの歩みとこれからのまちづくり」 国土交通省 平成21年度住まい・まちづくり担い手支援事業 『在日コリアン・コミュニティの持続型居住を実現する住環境整備計画策定活動』活動報告集 40-41頁

2010年 「在日演劇論② HIDEYOSHI—アメリカで聞いた「豊臣秀吉」と「耳塚」—」大阪国際理解教育研究センター・「Sai」編集委員会 編『Sai』第63号 20-22頁

2010年6月号 「文化人類学の地平から 第5回 ナショナルリティを越えて—済州スニム（僧侶）と信者の関係から見えてくるもの—」社団法人部落解放・人権研究所『月刊 ヒューマンライツ』No.267 36-42頁

2011年 「石切・辻子谷（仮題）」「在日コリアン寺院」「在日コリアン寺院のネットワーク」「コラム—在日コリアン寺院—」「続・生駒の神々（仮題）」宗教社会学の会編 創元社刊（4月出版予定）

山本須美子 2010年2月「フランスの初等教育における中国系新移民の受け入れの現状」『東洋大学社会学部紀要』第47-2号, 109-126頁

2010年2月「フランスにおける中国系アソシエーションと新移民の流入」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』第44号, 164-176頁

渡邊 暁子 2010年1月23日 「フィリピン＝中東間における国際労働力移動の展開—リクルーターの役割に焦点をおいて」, 東洋大学アジア文化研究所年次集会で報告

2010年 「The Pre-Departure Orientation Seminars: A way of Protecting Perspective Overseas Filipino Workers?, The 2010 Exeter Galf Studies Conference 2010」で口頭発表

研究所プロジェクト「境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ——地域間比較研究の定礎に向けて」計画による「日韓境域」調査

アジア文化研究所研究員 松本 誠 一  
客員研究員 井出 弘 毅

期 間：平成22年8月21日～30日

出張先：福岡・対馬・大韓民国（釜山広域市，巨済市）

研究所プロジェクト「境域アジアのトランスナショナル・コミュニティ——地域間比較の定礎に向けて」計画による「日韓境域」調査を行なった。今回の調査では、連絡船（福岡－対馬，対馬－釜山，釜山－巨済島間の3航路）により日韓間を往復することで、日韓境域の現状を把握することができた。特に対馬では歴史のみならず現在進行形の韓国との深い関係を見ることができた。また、直線距離で最も日本に近い巨済島において日韓の関係について調査した。さらに巨済島では、世界布教を進めるキリスト教会（長老教）の牧師一家のトランスナショナルなあり方についての聞き取り調査を行なった。

調査日程は、以下の通りである。

8月21日

空路福岡に入り博多港の港湾施設を見学した後、連絡船にて長崎県対馬市の厳原港に移動した。

8月22日

厳原では、朝鮮通信使を中心とする日韓交流に関する拠点・史蹟を十数ヶ所回った。その中で、以前は政治家として活躍し、現在は引退したものの真珠のビジネスを展開する方から、様々な情報を得ることができた。また観光案内所では、独学で韓国語をマスターし、現在は韓国人観光客の案内をしている方と会い、韓国人観光客の推移・現状について詳しく知ることができた。

8月23日

昨日では回りきれなかった日韓交流を窺える厳原町内の数ヶ所を回った。特に対馬新聞社では編集長と面会し、これまでの推移・現状などについてかなり詳細に聴くことができた。対馬新聞は縮刷版を作っていなかったが、新聞社の30年史を入手することができた。その後厳原港へと向かい、連絡船にて釜山に出発した。対馬島東南部に位置する厳原から、島の東側、そして北部沖を通過し、釜山へと向かった。

8月24日

沿岸旅客ターミナルから、連絡船にて巨済島（コジェド）の古県（コヒョン）港へ向かった。巨済博物館を訪問し、日本との関係を示すいくつかの文物について学芸員から説明を受けた。その後、玉浦（オッポ）港ターミナルへと向かい、次いで古の日本との海戦の大勝記念館を訪問した。

8月25日

キリスト教会を訪問し、牧師夫妻から海外布教の現状や、現在海外で暮らす子どもたちについていろいろとお話を聴くことができた。ちょうど今年はこの教会の創立100周年に当たり、教会の歴史などについても詳細に聴くことができた。

8月26日

長承浦（チャンスンポ）港に向かい、近くの書店の主人から、昔日本人が多く住んでいた場所についてなど植民地時代のお話をいろいろと聴くことができた。巨済文化院を再訪し、院長から参考資料について教えて頂いた。また日韓の交流についてもいろいろとお話を聴くことができた。その後巨済市役所に向かい、参考資料を購入するとともに観光部署の方からいろいろとお話を聴くことができた。

8月27日

船にて釜山へと向かった。釜山では、古書店街で巨済島に関する資料などを調査・購入した。その後、東亜大学の崔仁宅教授を訪問し、対馬との交流を中心に様々な情報を得ることができた。

8月28日

船にて対馬の厳原港へ向かった。対馬グリーンパークにて開催された「ちんぐ音楽祭」にて参与観察を行なった。その後レンタカーにて島を北上し、宿のある佐須奈へと向かった。

8月29日

西海岸へと向かい、釜山のビルの林立する様子、そして巨済島を見ることができた。直線距離にして49.5kmということもあるが、この季節で見ることができるのは珍しいとのことだった。その後北部地域を中心にいくつかの集落を回り、日韓関係を示す記念碑や場所を訪問した。また巨済島、

釜山との関係について数人の方々からお話を聞くことができた。しかし実際に行き来した人達は現在ではほとんど亡くなっており、今の国境が、かつての境のなかった時代とは大きく違う不便な海となっている様子を窺い知ることができた。さらに比田勝港ターミナルを訪問した。ちょうど釜山から船がついたところであり、対馬を訪れる韓国人観光客を多く見ることができた。

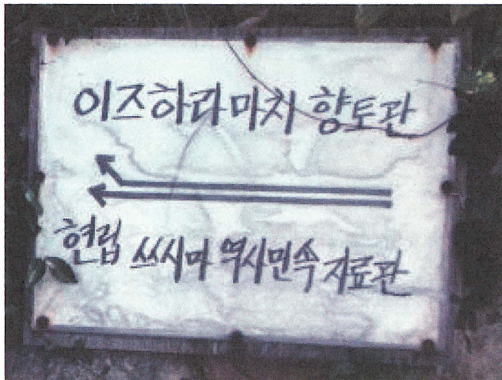
8月30日

佐須奈を出発し、南下する道すがら、日韓関係に関するいくつかの拠点を回った。厳原港から船にて博多港へと向かい、博多では韓国物産品を扱う店を訪問した。その後飛行機にて羽田空港へと帰着した。

8月21日から30日にかけて、古くから韓国との関係の深い福岡と対馬、そして韓国第2の都市である釜山広域市と、韓国第2の面積を持つ巨済島を訪問し調査を行なった。

まず対馬の中心地である厳原では、韓国との深い関係を示すスポットを調査した。こうしたスポットを訪れることで出会った人々から、現場での生の声を多数聴くことができた。ある神社の駐車場の管理人の女性からは、彼女の娘さんが韓国の大学に交換留学することを教えて頂き、韓国との民間交流の実像について詳しく知ることができた。また宿の主人からは、10年位前から増加してきた韓国人観光客について、旅館業者から見た実像についてかなり詳しく窺うことができた。この十年の間にはマナーの違いによる様々なトラブルや誤解などがあったが、最近では双方が理解を深めることで、そうしたトラブルをかなり回避できるようになってきたということである。島内の至る所で多くの韓国人観光客の姿を見ることができた。看板もハングルで書かれているものが多い(写真①⑦⑱)。

県立対馬歴史民俗資料館では、宗家文書のうちいくつかのものが展示されていた。前に釜山を訪れた際に気になったことであったが、釜山の国際旅客ターミナルから釜山税関ビルを過ぎた辺りの壁面に朝鮮通信使が描かれていた。その中で朝鮮側の人物は履物を履いているのに対し、日本側の人物はほとんどが裸足であるように描かれてい



写真① 【対馬】ハングルの看板(上：厳原町郷土館(現在は閉鎖)、下：県立対馬歴史民俗資料館)



写真② 【対馬】李王家・宗伯爵家御結婚奉祝記念碑(後ろは韓国の国花「無窮花(ムゲンファ)」)





写真③ 【対馬】朝鮮国王から宗家藩主の弔いのため贈られた青銅製の三具足（みつぐそく）



写真④ 【対馬】朝鮮との善隣交流に勤めた儒学者・雨森芳洲（あめのもりほうしゅう）の墓

た。これが単純な間違いによるものなのか、それとも偏見に基づく意図的なものであるのか定かではなかったが、本物を見たところ、これが間違いではないことが確認できた。

次に訪れたふるさと情報対馬館では、昔政治家として活躍していたが、現在は身を引いて、家業の真珠加工・販売を営む経営者から、対馬と韓国との関係について、個人史と関連した話を詳しく窺うことができた。

島内に散在する数々の歴史的スポットも、韓国との深い関係を示していた。植民地朝鮮と宗主国日本との融和を物語る李王家と宗伯爵家との結婚奉祝記念碑（写真②）や、対馬藩主宗氏と李氏朝鮮王朝との善隣外交を示す文物（写真③）などである。また朝鮮との善隣外交に寄与した儒学者であった雨森芳洲の墓（写真④）、朝鮮通信使の詩碑（写真⑤）、幕府使者の宿跡（写真⑥）、新羅國使の碑（写真⑦）、朝鮮國訳官使殉難之碑（写真⑧）、海神社社の階段横の柱（写真⑨）など両国関係を示す歴史的なスポットが数多く点在していた。これらのスポットの多くは厳原の中心地から徒歩で巡ることができる範囲にあり、観光スポットとしても回りやすい。

観光案内所では、韓国人観光客のための韓国語のサポートをしている女性と出会い、現在の韓国人観光客の実態について、かなり詳しく話を聴くことができた。彼女は独学で韓国語をマスターしたとのことである。留学はもちろん語学講座にも参加はしておらず、対馬に来る韓国人観光客をつかまえて、無理やり話しているうちに身についたとのことであった。そのためか彼女の話す韓国語は慶尚南道の方言であり、ソウルから来た韓国人観光客に「あなたは慶尚道の人か？」と尋ねられたそうである。厳原の中心に位置する対馬市交流センターTIALAには、韓国語支援のためのスポット（写真⑩）が用意されており、この女性は主としてここでサポートを勤めている。ここには彼女の携帯電話番号が書かれており、何かトラブルや分からないことがあれば、すぐに対応できるようにしていた。

対馬新聞社では、編集長の女性と会い話を聴くことができた。最初は非常に警戒された感があっ





写真⑤ 【対馬】朝鮮国通信使・鶴峯金誠一先生詩碑



写真⑥ 【対馬】幕府使者 遠山左衛門尉 (「遠山の金さん」のモデル遠山金四郎景元) 宿館跡の碑



写真⑦ 【対馬】新羅国使 毛麻利北智 朴堤上公 殉國之碑

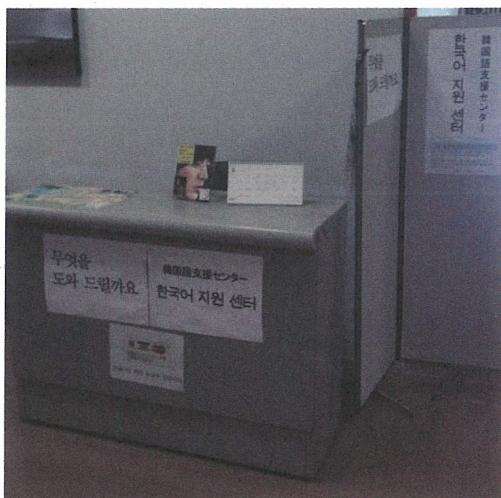


写真⑧ 【対馬】朝鮮国 訳官使 殉難之碑





写真⑨ 海神神社の階段横の柱（寄付した釜山の日本人の名前が見える）



写真⑩ 【対馬】対馬市交流センターTIALA内の韓国語支援センター

た。いろいろと話す中で、こちらの調査目的などについてきちんと説明をしたところ、次第に打ち解けることができた。これは数年前から対馬にやって来ては、韓国人を排斥せよという主張をする人々があり、我々もそうした種類の人間ではないかとの誤解からであった。事実そうした主張の一端を示す看板（写真⑪）を見ることができた。編集長は、対馬は観光業で成り立っているのに、島の外から関係のない人たちがやって来て反韓デモをやられては迷惑だ、とも語っており、一部の日本人によるナショナリスティックな実態について窺うことができた。また「戦後対馬30年史」を購入することができた。日韓間の貿易や交流などについても記載されており、貴重な資料である。

対馬から連絡船にて釜山に渡り、さらに巨済島へと移動した。巨済博物館では、日本との関係を示す文物の展示が行なわれており、学芸員から詳しい説明を受けた。家屋を復元した展示の中に、日本語が書かれた屏風が置かれていた。

前回に引き続き、インドやアフリカへの海外布教を活発に行なっているキリスト教会を訪問し、牧師夫妻から最近の布教活動の詳細や、家族の動向としてマレーシアやケニアで暮らす子どもたちの現状について詳しい話を聴くことができた。またちょうど今年の3月15日に教会創立100周年を迎えたこともあって、新聞記事や資料を頂くことができた。

玉浦（オッポ）港では、古の日本と朝鮮との海戦で、李舜臣率いる朝鮮水軍が日本水軍に勝利した「玉浦大捷」記念公園（写真⑫）を訪れた。当時の資料が数多く展示してあり、記念碑等は韓国のナショナリズムを窺わせるものであった。

長承浦（チャンスンポ）港では、書店の主人から植民地時代の日本人が集住していた地域についていろいろと詳しい話を聴くことができた。残念ながらその場所は、大規模な火災のため往時の日本家屋などは残っていないということであった。

巨済文化院（写真⑬）では院長から「巨済市誌」や「慶南文化遺産」という資料について教えて頂き、市庁の文化観光課にて資料を入手することができた。特に「巨済市誌」については、市のwebサイト上にPDFファイルにて全文が公開されているとのことであったが、確認したところ正誤表や写真資料ページが抜けており、現物を購入することとした。

長承浦港から海金剛（ヘクムガン）・外島（ウエド）を巡る遊覧船に乗り、巨済島の南東沖から対馬が見えるかどうか試みたが、天気が良く空気も澄んでいたにもかかわらず、残念ながら見るこ





写真⑪ 【対馬】「対馬防衛隊」による看板

とはできなかった。

巨済島から連絡船にて釜山に移動し、宝水洞の古書店を訪れた。ここでは日本と巨済島関係の資料を調査・収集した。次に東亜大学校の崔仁宅教授の研究室を訪問した。この夏、東亜大学校への入試説明会を対馬高校生を対象に実施したことや対馬の観光関係の調査をしている日本人研究者の情報、国史編纂委員会 web サイト上の有益な情報などについていろいろと教えて頂いた。

釜山から連絡船にて対馬の厳原に移動する途中、釜山と巨済島を結ぶ建設中の巨加大橋(写真⑭)を見ることができた。2010年12月完成したが、これまで連絡船で約1時間、道路で統営経由で約2時間かかっていたのが、50分で行けるようになる。

対馬では「対馬ちんぐ(友達)音楽祭」にて参与観察を行なった。日本のミュージシャンが中心となって1年に1回日韓双方のミュージシャンが一堂に会してライブ演奏を行なうものであり、今年で15回を数える。対馬市長の挨拶の中で、1年間に対馬の人口の10倍の韓国人観光客が訪れることが語られた。また両国が仲の良かった時代として、今年2010年から1443年の嘉吉条約(李氏朝鮮と対馬の貿易協定)を引いたものから1592年の文禄・慶長の役(壬申倭乱:イムジンウェラン)から1608年の朝鮮通信使の再開までを引いた551年間と紹介した(より正確にはそこから日本の植民地支配の36年間を引かなくてはならないのではと思った)。そして対馬が南北分断の朝鮮半島と日



写真⑫ 【巨済島】玉浦大捷記念公園



写真⑬ 【巨済島】巨済文化院



写真⑭ 【釜山-巨済島】釜山と加徳島, 巨済島を結ぶ巨加大橋(2010年12月完成)



本との交流における大事な役割を持っていることについて言及した。その後レンタカーにて北部の佐須奈へと移動した。

島の北部に移動したのは、もっとも近いポイントから韓国を見てみようという意図からであった。巨済島からは対馬をまったく見るができなかったため、逆に対馬から見てみようということである。この季節はまず見るのが難しいとの事前の話であった。しかし海の近くに出かけていた宿の主人から、釜山が見えるとの話を聞き、もっとも韓国に近い、島の北西端にある異国の見える丘展望塔や棹崎自然公園の展望台(写真⑮)からは、この季節にしては珍しくうっすらとではあるが、釜山を見ることができた(写真⑯)。一番近いはずの巨済島がかすかに見えるのに対して、釜山の町並みは比較的是っきりと見えた。見えるということは当然行くだらうと思われる。古の人々は普通に行き来していただろうが、国境が引かれた今日ではそれを超えなければならない。巨済島での聴き取りでも、かつての日本との往来を示すものは残っていても、割と最近の行き来についてはほとんど残っていないのが現状である。しかし島の北西部の海岸沿いに回っていく中で、数人の漁師に聴いたところでは、昔は大潮の夕方に「朝鮮潮」と言われ、朝鮮に向かって強い流れが発生し、それに乗れば楽に向こうに行くことができたとのことである。

さらに島を南下し、厳原から連絡船にて博多港へと戻った。福岡市内にある韓流グッズや韓国物産を扱う店舗を訪れた。残念ながら韓流グッズを扱う店は閉店していたが、ここが日本と韓国との1つの結節点となっていることは明らかである。

日本による植民地支配の開始からちょうど百年に当たる今年、日韓交流と双方の行き来を求めていくつかの場所を訪れた。今後の日本と韓国の交流を考える上で、貴重な調査ができたことは非常に幸いであった。



写真⑮ 【対馬】棹崎自然公園の展望台にある「日本最北西端の地」の碑の地図



写真⑯ 【対馬】棹崎自然公園から釜山を望む(水平線上の白い部分が町並み。薄く島影も見える。)





写真⑰ 【対馬】韓国展望所



写真⑱ 【対馬】民泊の看板

(文・写真は井出弘毅)